

# 吉野葛

谷崎潤一郎

青空文庫



## その一 自天王

私<sup>やまと</sup>が大和の吉野の奥<sup>おく</sup>に遊んだのは、既<sup>すで</sup>に二十年ほどまえ、明治の末か大正の初め頃<sup>ころ</sup>のことであるが、今とは違<sup>ちが</sup>つて交通の不便なあの時代に、あんな山奥、——近頃の言葉で云えば「大和アルプス」の地方なぞへ、何しに出かけて行く気になつたか。——この話はまずその因縁<sup>いんねん</sup>から説<sup>と</sup>く必要がある。

読者のうちには多分ご承知の方もあろうが、昔からあの地方、十津川、北山、川上の莊<sup>しやう</sup>あたりでは、今も土民によつて「南朝様」あるいは「自天王様」と呼ばれている南帝の後<sup>こうえ</sup>裔<sup>い</sup>に関する伝説がある。この自天王、——後龜山帝の玄孫<sup>げんそん</sup>に当らせられる北山<sup>きたやまの</sup>宮<sup>みや</sup>と云うお方が実際におわしましたことは専門の歴史家も認めるところで、決して単なる伝説ではない。ごくあらましを掻<sup>か</sup>摘<sup>つ</sup>まんで云うと、普通小中学校の歴史の教科書では、南朝の元<sup>げんちゆう</sup>中九年、北朝の明徳<sup>めいとく</sup>三年、將軍義満<sup>よしみつ</sup>の代に両統合体の和議が成立し、いわゆる吉野朝なるものはこの時を限りとして、後醍醐天皇<sup>ごだいご</sup>の延元<sup>えんげん</sup>元年以来五十余年で廃<sup>は</sup>絶<sup>ぜつ</sup>したとなつてゐるけれども、そののち嘉吉三年九月二十三日の夜半、楠二郎正秀と云

う者が大覚寺統の親王万寿寺宮を奉じて、急に土御門内裏を襲い、三種の神器を偷み出して叡山に立て籠つた事実がある。この時、討手の追撃を受けて宮は自害し給い、神器のうち宝剣と鏡とは取り返されたが、神璽のみは南朝方の手に残つたので、楠氏越智氏の一族等は更に宮の御子お二方を奉じて義兵を挙げ、伊勢から紀井、紀井から大和と、次第に北朝軍の手の届かない奥吉野の山間僻地へ逃れ、一の宮を自天王と崇め、二の宮を征夷大將軍に仰いで、年号を天靖と改元し、容易に敵の窺い知り得ない峽谷の間ようこくに六十有余年も神璽を擁していたと云う。それが赤松家の遺臣に欺かれて、お二方の宮は討たれ給い、ついに全く大覚寺統のおん末の絶えさせられたのが長禄元年十二月であるから、もしそれまでを通算すると、延元元年から元中九年までが五十七年、それから長禄元年までが六十五年、実に百二十二年ものあいだ、ともかくも南朝の流れを酌み給うお方が吉野におわして、京方きやうがたに対抗されたのである。

遠い先祖から南朝方に無二のお味方を申し、南朝びいきの伝統を受け継いで来た吉野の住民が、南朝と云えばこの自天王までを数え、「五十有余年ではありません、百年以上もつづいたのです」と、今でも固く主張するのに無理はないが、私もかつて少年時代に太平記を愛読した機縁から南朝の秘史に興味を感じ、この自天王の御事蹟を中心に歴史小説を組

み立ててみたい、——と、そう云う計画を早くから抱いていた。川上の莊の口碑を集め  
 たある書物によると、南朝の遺臣等は一時北朝方の襲撃を恐れて、今の大台ヶ原山の  
 麓の入の波から、伊勢の国境大杉谷の方へ這入った人跡稀な行き留まりの山奥、三の公  
 谷と云う溪合いに移り、そこに王の御殿を建て、神璽とはある岩窟の中に匿していたと  
 云う。また、上月記、赤松記等の記す所では、あらかじめ偽って南帝に降っていた間嶋  
 彦太郎以下三十人の赤松家の残党は、長祿元年十二月二日、大雪に乗じて不意に事を起し、  
 一手は大河内の自天王の御所を襲い、一手は神の谷の將軍の宮の御所に押し寄せた。王は  
 おん自ら太刀を振って防がれたけれども、ついに賊のために斃れ給い、賊は王の御首と  
 神璽とを奪って逃げる途中、雪に阻まれて伯母ヶ峰峠に行き暮れ、御首を雪の中に埋め  
 て山中にひと夜を明かした。しかるに翌朝吉野十八郷の莊司等が追撃して来て奮戦する  
 うち、埋められた王の御首が雪中より血を噴き上げたために、たちまちそれを見附け出し  
 て奪い返したと云う。以上の事柄は書物によつて多少の相違はあるのだが、南山巡  
 狩録、南方紀伝、桜雲記、十津川の記等にも皆載っているし、殊に上月記や赤松記は  
 当時の実戦者が老後に自ら書き遺したものでか、あるいはその子孫の手に成る記録であつて、  
 疑う余地はないのである。一書によると、王のお歳は十八歳であつたと云われる。また、

嘉吉の乱にいったん滅亡した赤松の家が再興されたのは、その時南朝の二王子を弑して、神璽を京へ取り戻した功績に報いたのであった。

いったい吉野の山奥から熊野へかけた地方には、交通の不便なために古い伝説や由緒ある家筋の長く存続しているものが珍しくない。たとえば後醍醐天皇が一時行在所にお充てになった穴生の堀氏の館など、昔のままの建物の一部が現存するばかりでなく、子孫が今にその家に住んでいると云う。それから太平記の大塔宮熊野落ちの条下に出て来る竹原八郎の一族、——宮はこの家にしばらくご滞在になり、同家の娘との間に王子をさえ儲けていらつしやるのだが、その竹原氏の子孫も栄えているのである。その外更に古いところでは大台ヶ原の山中にある五鬼継の部落、——土地の人はあれは鬼の子孫だ云つて、決してその部落とは婚姻を結ばず、彼等の方でも自分の部落以外とは結ぶことを欲しない。そして自分たちは役行者の前鬼の後裔だと称している。すべてがそんな土地柄であるから、南朝の宮方にお仕え申した郷士の血統、「筋目の者」と呼ばれる旧家は数多くあつて、現に柏木の附近では毎年二月五日に「南朝様」をお祭り申し、將軍の宮の御所跡である神の谷の金剛寺において厳かな朝拝の式を挙げる。その当日は数十軒の「筋目の者」たちは十六の菊のご紋章の附いた袴を着ることを許され、知事代理

や郡長等の上席に就くのである。

私の知り得たこう云ういろいろの資料は、かねてから考えていた歴史小説の計画に熱度を加えずにはいかなかった。南朝、——花の吉野、——山奥の神秘境、——十八歳になり給ううら若き自天王、——楠二郎正秀、——岩窟の奥に隠されたる神璽、——雪中より血を噴き上げる王の御首、——と、こう並べてみただけでも、これほど絶好な題材はない。何しろロケーションが素敵である。舞台には溪流あり、断崖あり、宮殿あり、茅屋あり、春の桜、秋の紅葉、それらを取り取りに生かして使える。しかも抛り所のない空想ではなく、正史はもちろん、記録や古文書が申し分なく備わっているのであるから、作者はただ与えられた史実を都合よく配列するだけでも、面白い読み物を作り得るであろう。が、もしその上に少しばかり潤色を施し、適当に口碑や伝説を取り交ぜ、あの地方に特有な点景、鬼の子孫、大峰の修験者、熊野参りの巡礼などを、王に配するに美しい女主人公、——大塔宮のご子孫の女王子などにしてもいいが、——を創造したら、一層面白くなるであろう。私はこれだけの材料が、なにゆえ今日まで稗史小説家の注意を惹かなかったかを不思議に思った。もつとも馬琴の作に「侠客伝」という未完物があるそうで、読んだことはないが、それは楠氏の一女姑摩姫と云

う架空かくうの女性を中心にしたものだと言いうから、自天王じせきの事蹟じせきとは関係かんけいがないらしい。外ほかに、吉野王あつかを扱あつかった作品さく品が一つか二つ徳川時代とくせんにあるそうだけれども、それとどこまで史実しじつに準じゆん拠きよしたものが明かでない。要するに普通世間ふつうに行き亘わたっている範圍はんいでは、読み本よみほんにも、浄瑠璃じよらりにも、芝居しばいにも、ついで眼めに触ふれたものはないのである。そんなことから、私は誰だれも手を染めないうちに、自分が是非共ぜひともその材料ざいりょうをこなしてみたいと思おもっていた。ところが、ここに、幸いなことには、思いがけない縁故えんこを辿たどって、いろいろあの山奥さんおくの方かたの地理ちりや風俗ふうぞくを聞き込むことが出来た。と言いうのは、一高時代いこうの友人ゆうじんの津村つむらと言いう青年せいねん、——それが、当人あたひは大阪おさかの人間にんげんなのだが、その親戚しんせきが吉野よしのの国栖くすに住すんでいたのので、私はたびたび津村つむらを介かしてそこへ問い合あわせ便宜べんぎがあつた。

「くす」と云いう地名ちめいは、吉野川よしのがわの沿岸附近ふきんに二箇所にかしよある。下流かしたの方かたの方は「葛くさ」の字あを充あて、上流かしたの方かたの方は「国栖くす」の字あを充あてて、あの飛鳥あすかのきよみはらのすめらみこと淨見じよけん原はら天皇てんむ、——天武天皇てんむにゆかりのある謡曲うたで有名ゆうめいなのは後者こうしやの方かたである。しかし葛くさも国栖くすも吉野よしのの名物めいぶつである葛く粉こなの生産地せいさんちと云いう訳わけではない。葛くさは知らないが、国栖くすの方かたでは、村人むらぢんの多くが紙かみを作つくって生活せいかつしている。それも今時いまどきに珍しい原始げんし的な方法かたで、吉野川よしのがわの水みづに楮こうぞの纖維せんいを晒さらしては、手てずきの紙かみを製つくるのである。そしてこの村むらには「昆布こんぶ」と云いう変かつた姓せいが非常ひじょうに多いの



だそうだが、津村の親戚もまた昆布姓を名のり、やはり製紙を業としていて、村では一番手広くやっている家であった。津村が語ったところでは、この昆布氏もかなりの旧家で、南朝の遺臣の血統と多少の縁故があるはずであった。私は、「入の波」と書いて「シオノハ」と読むこと、「三の公」は「サンノコ」であることなどを、この家へ尋ねて始めて知った。なお昆布氏の報告によると、国栖から入の波までは、五社峠の峻嶮を越えて六里に余る道程であり、それから三の公へは、峡谷の口もとまでが二里、一番奥の、昔自天王がいらしたと云う地点までは、四里以上ある。もつともそれも、そう聞いているだけで、国栖あたりからでもそんな上流地方へ出かける人はめつたにない。ただ川を下つて来る筏師の話では、谷の奥の八幡平と云う凹地に炭焼きの部落が五六軒あつて、それからまた五十丁行つたどんづまりの隠し平と云う所に、たしかに王の御殿の跡と云われるものがあり、神璽を奉安したと云う岩窟もある。が、谷の入り口から四里の間と云うものは、全く路らしい路のない恐ろしい絶壁の連続であるから、大峰修行の山伏などでも、容易にそこまでは入り込まない。普通柏木辺の人は、入の波の川の縁に湧いている温泉へ浴みに行つて、あそこから引き返して来る。その実谷の奥を探れば無数の温泉が溪流の中に噴き出で、明神が滝を始めとして幾すじとなく飛瀑が懸っているの

あるが、その絶景を知っている者は山男か炭焼きばかりであると云う。

この筏師の話は、一層私の小説の世界を豊富にしてくれた。すでに好都合な条件が揃っているところへ、またもう一つ、溪流から湧き出でる温泉と云う、打って付けの道具立てが加わったのである。しかし私は、遠隔えんかくの地において調べられるだけの事は調べてしまった訳であるから、もしあの時分に津村の勧誘かんゆうがなかったら、まさかあんな山奥まで出かけはしなかつたであろう。これだけ材料が集まっていれば、実地を踏査とうさしないで、あとは自分の空想で行ける。またその方がかえって勝手のよいこともあるのだが、「せつかくの機会だから来て見てはどうか」と津村からそう云って来たのは、たしかその年の十月の末か、十一月の初旬しよじゆんであった。津村は例の国栖おとの親戚を訪う用がある、それで、三の公までは行けまいけれども、まあ国栖の近所をひと通り歩いて、大体の地勢や風俗を見ておいたら、きつと参考になることがある。何も南朝の歴史に限ったことはない、土地が土地だから、それからそれと変った材料が得られるし、二つや三つの小説の種は大丈夫だいじょうぶが見つかる。とにかく無駄むだにはならないから、そこは大いに職業意識を働かせたらどうだ。ちようど今は季候もよし、旅行には持って来いだ。花の吉野と云うけれども、秋もなかなか悪くはないぜ。——と云うのであった。

で、大そう前置きが長くなつたが、こんな事情で急に私は出かける気になつた。もつとも津村の云うような「職業意識」も手伝つていたが、正直のところ、まあ漫然たる行樂の方が主であつたのである。

## その二 妹背山

津村は何日に大阪を立つて、奈良は若草山の麓の武蔵野と云うのに宿を取っている、——と、そう云う約束だつたから、こちらは東京を夜汽車で立ち、途中中京都に一泊して二日目の朝奈良に着いた。武蔵野と云う旅館は今もあるが、二十年前とは持主が變つてゐるようで、あの時分のは建物も古くさく、雅致があつたように思う。鉄道省のホテルが出來たのはそれから少し後のことで、当時はそこで、菊水とが一流の家であつた。津村は待ちくたびれた形で、早く出かけたい様子だつたし、私も奈良は曾遊の地であるし、ではいつそのこと、せつかくのお天氣が變らないうちにと、ほんの一二時間座敷の窓から若草山を眺めただけで、すぐ発足した。

吉野口で乗りかえて、吉野駅まではガタガタの軽便鉄道があつたが、それから先は吉

野川に沿うた街道を徒歩で出かけた。万葉集にある六田の淀、——柳の渡しあたりに道は二つに分れる。右へ折れる方は花の名所の吉野山へかかり、橋を渡るとじきに下の千本になり、関屋の桜、蔵王権現、吉水院、中の千本、——と、毎年春は花見客の雑沓する所である。私も実は吉野の花見には二度来たことがあって、幼少のおり上方見物の母に伴われて一度、そのち高等学校時代に一度、やはり群集の中に交りつつこの山道を右へ登った記憶はあるのだが、左の方の道を行くのは始めてであった。

近頃は、中の千本へ自動車やケーブルが通うようになったから、この辺をゆつくり見て歩く人はいないだろうけれども、むかし花見に来た者は、きつとこの、二股の道を右へ取り、六田の淀の橋の上へ来て、吉野川の川原の景色を眺めたものである。

「あれ、あれをご覧なさい、あすこに見えるのが妹背山です。左の方のが妹山、右の方のが背山、——」

と、その時案内の車夫は、橋の欄干から川上の方を指さして、旅客の笛をとどめさせる。かつて私の母も橋の中央に俵を止めて、頑是ない私を膝の上に抱きながら、

「お前、妹背山の芝居をおぼえているだろう？ あれがほんとうの妹背山なんだとき」と、耳元へ口をつけて云った。幼いおりのことであるからはっきりした印象は残っていない

いが、まだ山国は肌寒はださむい四月の中旬の、花ぐもりのしたゆうがた、白々しろしろと遠くぼやけた空の下を、川かわづら面に風の吹く道だけ細かいちりめん波を立てて、幾重いくえんにも折り重なった遥はるかな山の峽かいから吉野川が流れて来る。その山と山の隙間すきまに、小さな可愛い形の山が二つ、ぼうつと夕靄ゆうもやにかすんで見えた。それが川を挟さしはさんで向い合っていることまでは見分けるべくもなかったけれども、流れの兩岸にあるのだと云うことを、私は芝居で知っていた。歌舞伎かぶきの舞台では大判事清澄の息子久我之助こがのすけと、その許嫁いいなすけの雛鳥ひなどりとか云った乙女おとめとが、一方は背山に、一方は妹山に、谷に臨のぞんだ高樓たかどのを構えて住んでいる。あの場面は妹背山の劇の中でも童話的色彩のゆたかなところだから、少年の心に強く沁しみ込んでいたのであろう、そのおり母の言葉を聞くと、「ああ、あれがその妹背山か」と思い、今でもあのひとりへ行けば久我之助やあの乙女に遇あえるような、子供らしい空想くうそうに耽ふけつたものだが、以来、私はこの橋の上の景色を忘れずにいて、ふとした時になつかしく想おもい出すのである。それで二十一か二の歳の春、二度目に吉野へ来た時にも、再びこの橋の欄干もたに靠もたれ、亡なくなった母を偲しのびながら川上の方を見入ったことがあった。川はちようどこの吉野山の麓ふもとあたりからやや打ち展ひらけた平野に注そそぐので、水勢みづせの激はげしい溪流おもむきの趣おもむきが、「山なき国を流れけり」と云うのんびりとした姿に変わりかけている。そして上流の左の岸に上かみいち市の

町が、うしろに山を背負い、前に水を控えたひとすじみちの街道に、屋根の低い、まだらに白壁の点綴する素朴な田舎家の集団を成しているのが見える。

私は今、その六田の橋の袂を素通りして、二股の道を左へ、いつも川下から眺めてばかりいた妹背山のある方へ取った。街道は川の岸を縫うて真つ真ぐに伸び、みたところ平坦な、楽な道であるが、上市から宮滝、国栖、大滝、迫、柏木を経て、次第に奥吉野の山深く分け入り、吉野川の源流に達して大和と紀井の分水嶺を超え、ついには熊野浦へ出るのだと云う。

奈良を立ったのが早かったので、われわれは午少し過ぎに上市の町へ這入った。街道に並ぶ人家の様子は、あの橋の上から想像した通り、いかにも素朴で古風である。ところどころ、川べりの方の家並みが欠けて片側町になっていけるけれど、大部分は水の眺めを塞いで、黒い煤けた格子造りの、天井裏のような低い二階のある家が両側に詰まっている。歩きながら薄暗い格子の奥を覗いて見ると、田舎家にはお定まりの、裏口まで土間が通っていて、その土間の入り口に、屋号や姓名を白く染め抜いた紺の暖簾を吊っているのが多い。店家ばかりでなく、しもうたやでもそうするのが普通であるらしい。いづれも表の構えは押し潰したように軒が垂れ、間口が狭いが、暖簾の向うに中庭の樹立ちがちらついで、

離れ家なぞのあるのも見える。恐らくこの辺の家は、五十年以上、中には百年二百年もたっているのがある。が、建物の古い割りに、どこの家でも障子の紙が皆新しい。今貼りかえたばかりのような汚れ目のないのが貼つてあつて、ちよつとした小さな破れ目も花弁型の紙で丹念に塞いである。それが澄み切つた秋の空気の中に、冷え冷えと白い。一つは埃が立たないので、こんなに清潔なのでもあろうが、一つはガラス障子を使わない結果、紙に対して都会人よりも神経質なのであろう。東京あたりの家のように、外側にもう一つと重ガラス戸があればよいけれども、そうでなかつたら、紙が汚れて暗かったり、穴から風が吹き込んだりしては、捨てて置けない訳である。とにかくその障子の色のすがすがしさは、軒並みの格子や建具の煤ほけたのを、貧しいながら身だしなみのよい美女のように、清楚で品よく見せている。私はその紙の上に照っている日の色を眺めると、さすがに秋だなあと云う感を深くした。

実際、空はくつきりと晴れているのに、そこに反射している光線は、明るいながら眼を刺すほどでなく、身に沁みるように美しい。日は川の方へ廻つていて、町の左側の障子に映えているのだが、その照り返しが右側の方の家々の中まで届いている。八百屋の店先に並べてある柿が殊に綺麗であつた。キザ柿、御所柿、美濃柿、いろいろな形の柿の粒が、

一つ一つ戸外の明りをそのつやつやと熟し切った珊瑚色の表面に受け止めて、瞳のように光っている。饅頭屋のガラスの箱の中にある饅頭の玉までが鮮やかである。往来には軒先に菘を敷いたり、箕を置いたりして、それに消炭が乾してある。どこかで鍛冶屋の槌の音と精米機のサアサア云う音が聞える。

私たちは町はずれまで歩いて、とある食い物屋の川沿いの座敷で昼食を取った。妹背の山は、あの橋の上で眺めた時はもつとずつと上流にあるように思えたが、ここへ来るとつい眼の前に立つ二つの丘であった。川を隔てて、こちらの岸の方が妹山、向うの岸の方が背山、——妹背山婦女庭訓の作者は、恐らくこの实景に接してあの構想を得たのだろうが、まだこの辺の川幅は、芝居で見るとよりも余裕があつて、あれほど迫つた溪流ではない。仮りに両方の丘に久我之助の楼閣と雛鳥の楼閣があつたとしても、あんな風に互に呼応することは出来なかつたらう。背山の方は、尾根がうしろの峰につづいて、形が整っていないけれども、妹山の方は全く独立した一つの円錐状の丘が、こんもりと緑葉樹の衣を着ている。上市の町はその丘の下までつづいていて、川の方から見わたすと、家の裏側が、二階家は三階に、平家は二階になつていて、中には階上から川底へ針金の架線を渡し、それへバケツを通して、綱でスルスルと水を汲み上げるようにしたの



もある。

「君、妹背山の次には義経千本桜があるんだよ」

と、津村がふとそんなことを云つた。

「千本桜なら下市だろう、あそこの釣瓶鮎屋と云うのは聞いているが、——」

維盛が鮎屋の養子になつて隠れていたと云う浄瑠璃の根なし事が元になつて、下市の町にその子孫と称する者が住んでいるのを、私は訪ねたことはないが、噂には聞いていた。

何でもその家では、いがみの権太こそいないけれども、いまだに娘の名をお里と付けて、

釣瓶鮎を売っていると云う話がある。しかし津村の持ち出したのは、それとは別で、例の

静御前の初音の鼓、——あれを宝物として所蔵している家が、ここから先の宮滝の対

岸、菜摘の里にある。で、ついでだからそれを見て行こうと云うのであつた。

菜摘の里と云えば、謡曲の「一人静」に謡われている菜摘川の岸にあるのであろう。

「菜摘川のほとりにて、いづくともなく女の来り候いて、——」と、謡曲ではそこへ静

の亡霊が現じて、「あまりに罪業のほど悲しく候えば、一日経書いて賜われ」と云う。

後に舞いの件になつて、「げに耻かしや我ながら、昔忘れぬ心とて、……今三吉野の河

の名の、菜摘の女と思うなよ」などとあるから、菜摘の地が静に由縁のあることは、伝説

としても相当に根<sup>こんきよ</sup> 抛<sup>な</sup>があるらしく、まんざら出鱈目<sup>でたらめ</sup>ではないかも知れない。大和名所図会<sup>たいわなしょずゐ</sup>などにも、「菜摘<sup>さいてき</sup>の里<sup>さと</sup>に花籠<sup>はなかご</sup>の水<sup>みづ</sup>とて名水<sup>なみづ</sup>あり、また静御前<sup>しずみづめ</sup>がしばらく住みし屋敷趾<sup>やしきあし</sup>あり」とあるのを見れば、その云い伝えが古くからあったことであろう。鼓<sup>つづみ</sup>を持っている家は、今は大谷姓<sup>おほやに</sup>を名のっているけれども、昔は村国<sup>むらくに</sup>の庄司<sup>しょうじ</sup>と云って、その家の旧記<sup>きゅうき</sup>によると、文治年中<sup>ぶんじちゅう</sup>、義経<sup>よしつね</sup>と静御前<sup>しずみづめ</sup>とが吉野へ落ちた時、そこに逗留<sup>とまりゆう</sup>していたことがあると云われる。なお附近<sup>きんじ</sup>には象<sup>きんぞ</sup>の小川<sup>せうがわ</sup>、うたたねの橋<sup>はし</sup>、柴橋<sup>しばし</sup>等の名所<sup>なしょ</sup>もあつて、遊覧<sup>ゆうらん</sup>かたがた初音<sup>はつね</sup>の鼓<sup>つづみ</sup>を見せてもらいに行く者もあるが、家重代<sup>いえじゆうだい</sup>の宝<sup>たから</sup>だと云うので、然<sup>しか</sup>るべき紹介者<sup>しょうかいしや</sup>から前日<sup>ぜんじつ</sup>に頼<sup>たの</sup>みでもしなければ、無闇<sup>むやみ</sup>な者<sup>もの</sup>には見せてくれない。それで津村<sup>つむら</sup>は、実はそのつもりで国栖<sup>くくす</sup>の親戚<sup>おやしんせき</sup>から話<sup>わ</sup>しておいて貰<sup>もら</sup>ったから、多分<sup>たぶん</sup>今日<sup>けふ</sup>あたりは待<sup>まち</sup>っているはずだと云うのである。

「じゃあ、あの、親<sup>おやぎつね</sup> 狐<sup>きつね</sup>の皮<sup>かわ</sup>で張<sup>は</sup>つてあるんで、静御前<sup>しずみづめ</sup>がその鼓<sup>つづみ</sup>をぼんと鳴<sup>な</sup>らすと、忠<sup>た</sup> 信<sup>だのぶ</sup>狐<sup>きつね</sup>が姿<sup>すがた</sup>を現<sup>あらわ</sup>わすと云う、あれなんだね」

「うん、そう、芝居<sup>しばい</sup>ではそうなっている」

「そんなものを持つている家があるのかい」

「あると云うことだ」

「ほんとうに狐の皮で張つてあるのか」

「そいつは僕ぼくも見ないんだから請うけ合あえない。とにかく由ゆい緒しよのある家だと云うことは確かだそうだ」

「やっぱりそれも釣瓶鮎屋おんなと同じようなものじゃないかな。謡曲に『二人静』があるんで、誰か昔のいたずら者が考かえ付ついたことなんだろう」

「そうかも知れないが、しかし僕はちよつとその鼓に興味があるんだ。是非その大谷と云う家を訪ねて、初音の鼓を見ておきたい。——とうから僕はそう思つていたんだが、今度の旅行も、それが目的の一つなんだよ」

津村はそんなことを云つて、何か訳があるらしかったが、「いずれ後で話をする」と、その時はそう云つたきりであつた。

### その三 初音の鼓

上市から宮滝まで、道は相変らず吉野川の流れを右に取つて進む。山が次第に深まるに連つれて秋はいよいよたけなわ闌たけなわになる。われわれはしばしばくぬぎ櫟林くぬぎの中に這はい入はいつて、一面に散り敷く落

葉の上をかさかさ音を立てながら行つた。この辺、楓が割合いに少く、かつひと所にかたまつていないけれども、紅葉は今が真つ盛りで、蔦、櫨、山漆などが、杉の木の多い峰のここかしこに点々として、最も濃い紅から最も薄い黄に至る色とりどりの葉を見せている。ひと口に紅葉と云うものの、こうして眺めると、黄の色も、褐の色も、紅の色も、その種類が実に複雑である。おなじ黄色い葉のうちにも、何十種と云うさまざま違つた黄色がある。野州塩原の秋は、塩原じゅうの人の顔が赤くなると云われているが、そう云うひと色に染まる紅葉も美観ではあるけれども、このようなのも悪くはない。「繚乱」と云う言葉や、「千紫万紅」と云う言葉は、春の野の花を形容したものであろうが、ここのは秋のトーンであるところの「黄」を基調にした相違があるだけで、色彩の變化に富むことはおそらく春の野に劣るまい。そうしてその葉が、峰と峰との裂け目から溪合ひへ溢れ込む光線の中を、ときどき金粉のようにきらめきつつ水に落ちる。

万葉に、「天皇幸于吉野宮」とある天武天皇の吉野の離宮、——笠朝臣金村のいわゆる「三吉野乃多芸都河内之大宮所」、三船山、人麿の歌つた秋津の野辺等は、皆この宮滝村の近くであると云う。私たちはやがて村の中途から街道を外れて対岸へ渡つた。この辺で溪はようやく狭まって、岸が峻しい断崖になり、激した水が川床の巨岩に打つかり、

あるいは真つ青な淵を湛えている。うたたねの橋は、木深い象谷の奥から象の小川がちよろちよると微かなせせらぎになつて、その淵へ流れ込むところに懸つていた。義経がここでうたたねをした橋だと云うのは、多分後世のこじつけであろう。が、ほんのひとすじの清水の上に渡してある、きやしやな、危げなその橋は、ほとんど樹々の繁みに隠されていて、上に屋形船のそれのような可愛い屋根が附いているのは、雨よりも落葉を防ぐためではないのか。そうしなかつたら、今のような季節にはたちまち木の葉で埋まつてしまふかと思われる。橋の袂に二軒の農家があつて、その屋根の下を半ば我が家の物置きに使っているらしく、人の通れる路を残して薪の束が積んである。ここは樋口と云う所で、そこから道は二つに分れ、一方は川の岸を菜摘の里へ、一方はうたたねの橋を渡り、桜木の宮喜佐谷村を経て、上の千本から苔の清水、西行庵の方へ出られる。けだし静の歌にある「峰の白雪踏み分けて入りにし人」は、この橋を過ぎて吉野の裏山から中院の谷の方へ行つたのであろう。

気が付いてみると、いつの間にか私たちの行く手には高い峰が眉近く聳えていた。空の領分は一層狭くちぢめられて、吉野川の流れも、人家も、道も、ついもうそこで行き止まり。そんな溪谷であるが、人里と云うものは狭間があればどこまでも伸びて行くものと見えて、

その三方を峰のあらしで囲まれた、袋の奥のような凹地の、せせこましい川べりの斜面に段を築き、草屋根を構え、畑を作っている所が菜摘の里であると云う。

なるほど、水の流れ、山のたたずまい、さも落人の栖みそうな地相である。

大谷と云う家を探ねると、すぐに分つた。里の入り口から五六丁行つて、川原の方へ曲つた桑畑の中にある、ひと際立派な屋根の家であつた。桑が丈高く伸びているので、遠くから望むと、旧家らしい茅葺きの台棟と瓦葺きの庇だけが、桑の葉の上に、海中の島のごとく浮いて見えるのがいかにも床しい。しかし實際の家は、屋根の形式の割合に平凡な百姓家で、畑に面したふた間つづきの出居の間の、前通りの障子を明け放しにして、その床の間つきの方の部屋に主人らしい四十恰好の人がすわっていた。そして二人の姿を見ると、刺を通ずるまでもなく挨拶に出たが、固く引き締まつた日に焼けた顔の色と云い、シヨボシヨボした、人の好きそうな眼つきと云い、首の小さい、肩幅の広い体格と云い、どうしても一介の愚直な農夫である。「国栖の昆布さんからお話がありましたので、先程からお待ちしていました」と、そう云う言葉さえ聞き取りにくい田舎訛りで、こちらが物を尋ねてもはかばかしい答えもせず、ただ律義らしく時儀をして見せる。思うにこの家は今は微禄して、昔の俵はないのであろうが、それでも私にはかえ

つてこう云う人柄の方が親しみ易い。「お忙しいところをお妨げして済みませぬ。お宅様ではお家の宝物を大切にしていらしつて、めったに人にお見せにならぬようですが、無躰ながらその品を見せて戴きに参ったのです」と云うと、「いえ、人に見せぬと申す訳ではありませぬが」と当惑そうにオドオドして、実はその品物を取り出す前には、七日の間潔斎せよと云う先祖からの云い伝えがある、しかし当節はそんなやかましいことを云つてもいられないから、希望の方には心安く見せて上げようと思つていられるけれども、日々耕作に追われる身なので、不意に訪ねて来られては相手になつてゐる時間がない。殊に昨今は秋蚕の仕事が片附かないので家じゅうの畳なども不断は全部揚げてあるような訳だから、突然お客様が見えても、お通し申す座敷もないと云う始末、そんな事情で、前にちよつと知らせて置いて下すつたら、必ず何とか繰り合せてお待ちしている、と、真つ黒な爪の伸びた手を膝の上に重ねて、云いにくそうに語るのである。

して見れば、今日は特に私たちのために、このふた間の部屋へわざわざ畳を敷き詰めて待つていてくれたに違いない。襖の隙から納戸の方を窺うと、そこはいまだに床板のままで、急にそちらへ押し込めたらしい農具がごたごたに片寄せてある。床の間には既に宝物の数々が飾つてあつて、主人はそれらの品を一つ一つ、恭しく私たちの前に並べた。

「菜摘郵来由」と題する巻物が一卷、義経公より拝領の太刀脇差数口、及びその目録、鐔、鞆、陶器の瓶子、それから静御前より賜わった初音の鼓等の品々。そのうち菜摘郵来由の巻物は、巻末に「右者五条御代官御役所時之御代官内藤左衛門様当时に被遊御出御中付候二付大谷源兵衛七十六歳にて伝聞之儘を書記し我家に残し置者也」とあつて、「安政二歳次乙卯夏日」と云う日附けがある。その安政二年の歳に代官内藤左衛門が当村へ来た時、今の主人の何代か前の先祖にあたる大谷源兵衛老人は土下座をして対面したが、この書付けを見せると、今度は代官の方が席を譲つて土下座をしたと伝えられている。但し、巻物は紙が黒焦げに焦げたごとく汚れていて、判読に骨が折れるため、別に写しが添えてある。原文の方はどうか分らぬが、写しの方は誤字誤文が夥しく、振り仮名等にも覚束ない所が多々あつて、到底正式の教養ある者の筆に成つたとは信ぜられない。しかしその文によると、この家の祖先は奈良朝以前からこの地に住し、壬申の乱には村国庄司男依なる者天武帝のお味方を申して大友皇子を討ち奉つた。その頃庄司は当村より上市に至る五十丁の地を領していたので、菜摘川と云う名はその五十丁の間の吉野川を呼ぶのであると云う。さて義経に関しては、「また源義経公川上白矢ガ嶽にて五月節句をお祝遊されそれより御下りこれあり村国庄司内にて三十四日被遊御逗留宮滝柴橋御



覽有りその時御詠みの歌に」として二首の和歌が載っている。私は今日までまだ義経の歌と云うものがあるのを知らないが、そこに記してある和歌は、いかな素人眼にも王朝末葉の調子とは思えず、言葉づかひも余りはしたない。次に静御前の方は、「その時義経公の愛 妾 静御前村国氏のご逗留あり義経公は奥州に落行給いしより今は早頼み少なしとお命を捨給いたる井戸あり静井戸と申伝え候也」とあるから、ここ

で死んだことになっているのである。なおその上に、「然るに静御前義経公に別れ給いし妄念にや夜な夜な火玉となりて右乃井戸より出し事凡三百年その頃おい飯貝村に蓮如上人諸人を化益ましましければ村人上人を相頼静乃亡霊を濟度し給わんやと願ければ上人左右なく接引し給い静御前乃振袖大谷氏に秘蔵いたせしに一首乃歌をなん書記し給いぬ」としてその歌が挙げてある。

私たちがこの巻物を読む間、主人は一言の説明を加えるでもなく、黙って畏まっているだけであつた。が、心中何の疑いもなく、父祖伝来のこの記事の内容を頭から盲信しているらしい顔つきである。「その、上人がお歌を書かれた振袖はどうされましたか」と尋ねると、先祖の時代に、静の菩提を弔うために村の西生寺と云う寺へ寄附したが、今は誰の手に渡つたか、寺にもなくなつてしまつたとのこと。太刀、脇差、鞆等を手に取つて見る

のに、相当年代の立つたものらしく、殊に靱はぼろぼろにいたんでいるけれども、私たちに鑑定かんていの出来る性質のものではない。問題の初音の鼓は、皮はなくて、ただ胴どうばかりが桐きりの箱はこに収まっていた。これもよくは分らないが、漆うるしが比較的新しいようで、蒔絵まきえの模様もようなどもなく、見たところ何の奇きもない黒無地の胴である。もつとも木地きじは古いようだからあるいはいつの代かに塗り替かえたものかも知れない。「さあそんなことかも知じませぬ」と、主人は一向無関心な返答をする。

外ほかに、屋根とびらと扉いの附いた殿いめしい形の位牌いはいが二基ある。一つの扉あおいには葵もんの紋もんがあつて、中に「贈正一位大相国公尊儀」と刻し、もう一つの方は梅鉢うめぼちの紋もんで、中央に「歸真 松譽 貞玉信女靈位」と彫ほり、その右に「元文二年巳年げんぶん 二年 巳年」、左に「壬十一月十日みづのえ」とある。しかし主人はこの位牌についても、何も知るところはないらしい。ただ昔から、大谷家の主君に当る人のものと云われ、毎年正月元日にはこの二つの位牌を礼拝するのが例になっている。そして元文の年号のある方を、あるいは静御前ではないかと思ひます。と、真ま顔がおで云うのである。

その人の好きよそうな、小心らしいシヨボシヨボした眼を見ると、私たちは何も云うべきこととはなかつた。今更元文の年号がいつの時代であるかを説き、静御前の生しょうが涯がいについて

吾妻鑑あずまかがみや平家物語を引き合いに出すまでもあるまい。要するにここの主人は正直いちぢす一途に  
 そう信じているのである。主人の頭にあるものは、鶴ヶ岡つるがおかの社頭つらにおいて、頼朝よりともの面前  
 で舞を舞ったあの静とは限らない。それはこの家の遠い先祖が生きていた昔、——なつ  
 かしい古代を象徴しやうちやうする、ある高貴の女性である。「静御前」と云う一人の上臈じやうろうの  
 幻影げんえいの中に、「祖先」に対し、「主君」に対し、「古え」に対する崇敬すうけいと思慕しぼの情と  
 を寄せているのである。そう云う上臈が実際この家に宿を求め、世を住み侘わびていたかど  
 うかを問う用はない。せつかく主人が信じているなら信じるに任せておいたらよい。強い  
 て主人に同情をすれば、あるいはそれは静ではなく、南朝の姫宮方ひめみやであつたか、戦国頃  
 の落人であつたか、いずれにしてもこの家が富み栄えていた時分に、何か似寄りによの事実が  
 あつて、それへ静の伝説まぎが紛れ込んだものかも知れない。  
 私たちが辞じして帰ろうとすると、

「何もお構い出来ませぬが、ずくしを召し上つて下さいますせ」  
 と、主人は茶を入れてくれたりして、盆ぼんに盛った柿かきの実に、灰の這入はいっていない空からの火入  
 れを添そえて出した。

ずくしはけだし熟う※に熟うれた※しながら、日に透すかすと琅玕ろうかんの珠たまのように美しい。市中

に売っている樽※に崩れてしまう。主人が云うのに、ずくしを作るには皮の厚い美濃※としたものにならない。これを食うには半熟の卵を食うようにへたを抜き取って、その穴から匙さじですくう法もあるが、やはり手はよごれても、器に受けて、皮を剥はいでたべる方が美味である。しかし眺めても美しく、たべてもおいしいのは、ちようど十日目頃のわずかな期間で、それ以上日が立てばずくしもついに水になってしまふと云う。

そんな話を聞きながら、私はしばらく手の上にある一いっ顆かの露つゆの玉に見入った。そして自分の手のひらの中に、この山間の靈れい氣きと日光とが凝こり固かまった気がした。昔田舎者が京へ上ると、都の土をひと握にぎり紙しに包んで土産みやげにしたと聞いているが、私わたしがもし誰かから、吉野の秋の色を問われたら、この柿の実を大切に持ち帰って示すであろう。

結局大谷氏の家で感心したものは、鼓つづみよりも古文書よりも、ずくしであった。津村も私も、齒はぐきから腸はらわたの底そこへ沁しみ徹とおる冷つめたさを喜よろこびつつ甘い粘ねばっこい柿かきの実みを食むむように二つまで食べた。私は自分の口こう腔くうに吉野の秋を一いっ杯ぱいに頬張ほおばった。思うに仏典中にある菴摩羅あんも果らもこれほど美味ではなかつたかも知れない。

#### その四

#### 狐こんかい噺ばなし

「君、あの由来書きを見ると、初音の鼓は静御前の遺物とあるだけで、狐の皮と云うことは記していないね」

「うん、——だから僕は、あの鼓の方が脚本より前にあるのだと思う。後で拵えたものなら、何とかもう少し芝居の筋に關係を付けないはずはない。つまり妹背山の作者が实景を見てあの趣向を考えついたように、千本桜の作者もかつて大谷家を訪ねたか噂を聞いたかして、あんなことを思いついたんじゃないかね。もつとも千本桜の作者は竹田出雲だから、あの脚本の出来たのは少くとも宝曆以前で、安政二年の由来書きの方が新しいと云う疑問がある。しかし『大谷源兵衛七十六歳にて伝聞のままを書記し』たと云っている通り、伝来はずつと古いんじゃないか。よしんばあの鼓が贗物だとしても、安政二年に出来たものでなく、ずつと以前からあったんだと云う想像をするのは無理だろうか」

「だがあの鼓はいかにも新しそうじゃないか」

「いや、あれは新しいか知れないが、鼓の方も途中で塗り換えたり造り換えたりして、二代か三代立っているんだ。あの鼓の前には、もつと古い奴がああ桐の箱の中に収まっているんだと思うよ」

菜摘の里から対岸の宮滝へ戻るには、これも名所の一つに数えられている柴橋を渡るのである。私たちはその橋の袂の岩の上に腰かけながらしばらくそんな話をした。

貝原益軒の和州巡覽記に、「宮滝は滝にあらざ両方に大岩ありその間を吉野川ながる也両岸は大なる岩なり岩の高さ五間ばかり屏風を立たるごとし両岸の間川の広さ三間ばかりせばき所に橋あり大河ここに至つてせばきゆえ河水甚深しその景絶妙也」とあるのが、ちようど今私たちの休んでいるこの岩から見た景色であろう。「里人岩飛とて岸の上より水底へ飛入て川下におよぎ出て人に見せ銭をとる也飛ときは両手を身にそえ両足をあわせて飛入水中に一丈ばかり入て両手をはれば浮み出るといふ」とあつて、名所図会にはその岩飛びの図が出ているが、両岸の地勢、水の流れ、あの絵の示す通りである。川はここへ来て急カーヴを描きつつ巨大な巖の間へ白泡を噴いて沸り落ちる。さつき大谷家で聞いたのに、毎年筏がこの岩に打つかつて遭難することが珍しくないと云う。岩飛びをする里人は、平生この辺で釣りをしたり、耕したりして、たまたま旅人の通る者があれば、早速勧誘して得意の放れ業を演じて見せる。向う岸のやや低い岩から飛び込むのが百文、こちら岸の高い方の岩からなら二百文、それで向うの岩を百文岩、こちらの岩を二百文岩と呼び、今にその名が残っているくらいで、大谷家の主人も若い時分に見たこと

があるけれども、近頃はそんなものを見物する旅客も稀まれになり、いつか知らず滅ほろびてしまつたのだそうである。

「ね、昔は吉野の花見と云うと、今のように道が拓ひらけていなかつたから、宇陀郡うだの方を廻つて来たりして、この辺を通る人が多かつたんだよ。つまり義経の落ちて来た道と云うのが普通の順路じゃなかつたのかね。だから竹田出雲なんぞきつとここへやって来て、初音の鼓を見たことがあるんだよ」

——津村はその岩の上に腰をおろして、いまだに初音の鼓のことをなぜか気にかけているのである。自分は忠信ただのぶぎつ狐ねではないが、初音の鼓を慕したう心は狐にも勝るくらいだ、自分は何だか、あの鼓を見ると自分の親あに遇つたような思いがする、と、津村はそんなことを云い出すのであつた。

ここで私は、この津村と云う青年の人となりをあらまし読者に知って置いて貰わねばならない。実を云うと、私もその時その岩の上で打ち明け話を聞かされるまで委くわしいことは知らなかつた。——と云うのは、前にもちよつと述べたように、彼と私とは東京の一高時代の同窓で、当時は親しい間柄であつたが、一高から大学へ這入る時に、家事上の都合と云うことで彼は大阪の生家へ帰り、それきり学業を廃はいしてしまつた。その頃私が聞いたの

では、津村の家は島の内の旧家で、代々質屋を営み、彼の外に女のきょうだい二人あるが、両親は早く歿して、子供たちは主に祖母の手で育てられた。そして姉娘はつとに他家へ縁づき、今度妹も嫁入り先がきまつたについて、祖母も追ひ追ひ心細くなり、忤を側へ呼びたくなつたのと、家の方の面倒を見る者がないので、急に学校を止めることにした。「それなら京大へ行つたらどうか」と、私はすすめてみたけれども、当時津村の志は学問よりも創作にあつたので、どうせ商売は番頭任せでよいのだから、暇を見てぼつぼつ小説でも書いた方が気楽だと、云うつもりらしかつた。

しかしそれ以来、ときどき文通はしていたのだが、一向物を書いていないらしい様子もなかつた。ああは云つても、家に落ち着いて暮らしに不自由のない若旦那になつてしまえば、自然野心も衰えるものだから、津村もいつとなく境遇に馴れ、平穩な町人生活に甘んずるようになったのであろう。私はそれから二年ほど立つて、ある日彼からの手紙の端に祖母が亡くなつたと云う知らせを読んだ時、いずれ近いうちに、あの「御料人様」と云う言葉にふさわしい上方風な嫁でも迎えて、彼もいよいよ島の内の旦那衆になり切ることだろうと、想像していた次第であつた。

そんな事情で、その後津村は二三度上京したけれども、学校を出てからゆっくり話し合う



機会を得たのは、今度が始めてなのである。そして私は、この久振ひさしぶりで遇あう友の様子が、大体想像の通りであつたのを感じた。男も女も学生生活を卒おえて家庭の人になると、にわかには榮養が良くなつたように色が白く、肉づきが豊かになり、體質に変化が起るものだが、津村の人柄にもどこか大阪のぼんちらしいおっとりした円みが出来、まだ抜け切れない書生言葉のうちにも上方かみがたなま訛りのアクセントが、——前から多少そうであつたが、前よりは一層けんちよ顕著に——交るのである。と、こう書いたらおおよそ読者も津村と云う人間のがいぼう外貌を会得されるであらう。

さてその岩の上で、津村が突然語り出した初音の鼓と彼自身に纏まつわる因縁いんねん、——それからまた、彼が今度の旅行を思い立つに至つた動機、彼の胸に秘めていた目的、——そのいきさつは相当長いものになるが、以下なるべくは簡略に、彼の言葉の意味を伝えることにしよう。——

自分のこの心持は大阪人でないと、また自分のように早く父母を失つて、親の顔を知らない人間でないと、（——と、津村が云うのである。）到底とうてい理解されなにかと思う。君もご承知の通り、大阪には、浄瑠璃じやうるりと、生田流いくたの箏そうきよく曲と、地唄じうたと、この三つの固有

な音楽がある。自分は特に音楽好きと云うほどでもないが、しかしやはり土地の風習でそう云うものに親しむ時が多かったから、自然と耳について、知らず識らず影響を受けている点が少ない。取り分けいまだに想い出すのは、自分が四つか五つのおり、島の内の家の奥の間で、色の白い眼元のすずしい上品な町方の女房と、盲人の検校とが琴と三味線を合わせていた、——その、ある一日の情景である。自分はその時琴を弾いていた上品な婦人の姿こそ、自分の記憶の中にある唯一の母の傍であるような気がするけれども、果してそれが母であったかどうかは明かでない。後年祖母の話によると、その婦人は恐らく祖母であつたらう、母はそれより少し前に亡くなつたはずであると云う。が、自分はまたその時検校とその婦人が弾いていたのは生田流の「狐噺」と云う曲であつたことを不思議に覚えているのである。思うに自分の家では祖母を始め、姉や妹が皆その検校の弟子であつたし、その後も折々狐噺の曲を繰り返して聴いたことがあるから、始終印象が新たにされていたのであらう。ところでその曲の詞と云うのは、——

いたわしや母上は、花の姿に引き替えて合しおる露の床の内合智慧の鏡も掻き曇る、  
法師にまみえ給いつつ合母も招けばうしろみ返りて合さらばと云わぬ合ばかりにて、泣くより外の合事ぞなき、野越え山越え里打ち過ぎて合来るは誰故ぞ合さま故合誰故来

るは合来るは誰故ぞ様故合君は帰るか恨めしやのうやれ合我が住む森に帰らん我が思う  
 思う心のうちは白菊岩隠れ薦がくれ、篠の細道掻き分け行けば、虫のこえごえ面白や  
 合降りそむる、やれ降りそむる、けさだにも合けさだにも合所は跡もなかりけり合西は  
 田の畦あぶないさ、谷峯しどろに越え行け、あの山越えてこの山越えて、こがれこがる  
 るうき思い。

——自分は今では、この節廻しも合いの手もことごとく暗んじてしまっているが、あ  
 の検校と婦人の席でこれをたしかに聞いた記憶が存しているのは、何かしらこの文句の中  
 に頑是ない幼童の心を感銘させるものがあつたに違いない。

もともと地唄の文句には辻褄の合わぬところや、語法の滅茶苦茶なところが多くて、殊  
 更意味を晦渋にしたのかと思われるものがたくさんある。それに謡曲や浄瑠璃の故  
 事を踏まえているのなどは、その典拠を知らないではなおさら解釈に苦しむ訳で、「狐  
 噺」の曲も大方別に基づくところがあるのであろう。しかし「いたわしや母上は花の姿  
 に引き替えて」と云い、「母も招けばうしろみ返りて、さらばと云わぬばかりにて」と云  
 い、逃げて行く母を恋慕う少年の悲しみの籠っていることが、当時の幼い自分にも何と  
 はなしに感ぜられたと見える。その上「野越え山越え里打ち過ぎて」と云い、「あの山越

えてこの山越えて」と云う詞には、どこか子守唄こもりうたに似た調子もある。そしてどう云う連想の作用か、「狐こんかい噲う」と云う文字も意味も分るはずはなかったのに、そののち幾いくたびかこの曲を耳にするに随したがつて、それが狐きつねに關係のあるらしいことを、おぼろげながら悟さとるようになった。

これは多分、しばしば祖母に連れられて文楽座ぶんらくざや堀江座ほりえざの人形芝居へ行つたものだから、そんな時に見た葛くずの葉はの子別れの場が頭に沁しみ込んでいたせいであろう。あの、母狐が秋の夕ぐれに障子しょうじの中で機はたを織つている、とんからり、とんからりと云う箴おせの音。それから寝ねている我が子に名残なごりを惜おしみつつ「恋こいしくば訪ね来てみよ和泉いずみなる——」と障子へ記すあの歌。——ああ云う場面が母を知らない少年の胸うつたに訴うえる力は、その境きょう遇うの人でなければ恐おそらく想像おぼも及およぶまい。自分は子供ながらも、「我が住む森に帰らん」と云う句、「我が思う思う心のうちは白菊岩隠れ蔦つたがくれ、篠の細道搔かき分け行けば」などと云う唄のふしのうちに、色とりどりな秋の小径こみちを森の古巢ふるすへ走つて行く一匹びきの白狐びゃつこの後影を認め、その跡を慕しとうて追いかける童子どうじの身の上を自分に引きくらべて、ひとしお母恋いしさの思いに責められたのであろう。そう云えば、信田しのだの森は大阪の近くにあるせいか、昔から葛の葉を唄つた童謡どうようが家庭の遊戯ゆうぎと結び着いて幾種類か行われているが、

自分も二つばかり覚えていのあるのがある。その一つは、

釣ろうよ、釣ろうよ

信田の森の

狐どんを釣ろうよ

と唄いながら、一人が狐になり、二人が獺かりうど人になつて輪を作つた紐ひもの両端を持つて遊ぶ狐釣りの遊戯である。東京の家庭にもこれに似た遊戯があると聞いて、自分がかつてある待まちあ合で芸者にやらせて見たことがあるが、唄の文句も節廻しも大阪のとはやや違う。それに遊戯する者も、東京ではすわつたままだけれども、大阪では普通立つてやるので、狐になつた者が、唄につれておどけた狐の身振みぶりをしながら次第に輪の側へ近づいて来るのが、—— たまたまそれが艶えんな町娘や若い嫁よめであつたりすると、殊ことに可愛かわいい。少年の時、正月の晩などに親戚の家へ招かれてそんな遊びをした折に、あるあどけない若女わかにようぼう房で、その狐の身振みぶりが優すぐれて上手な美しい人があつたのを、今に自分は忘れずにいるくらいである。なおもう一つの遊戯は、大勢が手をつなぎ合つて円座を作り、その輪のまん中へ鬼おにをすわらせる。そして豆のような小さな物を鬼に見せないように手の中へ隠かくして、唄をうたいつづ順々に次の人の手へ渡して行き、唄が終ると皆みなじつと動かずにいて、誰の手の中に豆が

あるかを鬼に中てさせる。その唄の詞はこう云うのである。

麦摘つウんで

蓬摘つウんで

お手にお豆がこウこのつ

九ウつの、豆の数より

親の在所が恋いしゆうて

恋いしイクば

訪ね来てみよ

信田のもウりのうウらみ葛くずの葉は

自分はこの唄にはほのかながら子供の郷愁きやうしゆうがあるのを感じる。大阪の町方には、河内かわち和泉いずみ、あの辺の田舎いなかから年期奉公ほうこうに来ている丁稚てつちや下女げにょが多いが、冬の夜寒よさむに、表の戸いを締め、そう云う奉公人ほうこうにんども共が家族の者たちと火鉢ひばちのぐるりに団居まどいしながらこの唄をうたつて遊ぶ情景は、船場せんばや島の内あたりに店を持つ町家まちやにしばしば見受けられる。思うに草深い故郷を離れて、商法ぎやうぎや行儀ぎやうぎを見習いに来ている子弟等ちらは、「親の在所が恋いしゆうて」と何気なく口ずさむうちにも、茅葺かやぶきの家の薄暗い納戸なんどにふせる父母の倅おもかげしを偲しのび

つつあつたであろう。自分は後世、忠臣蔵の六段目で、あの、深編笠ふかあみがきの二人侍が訪ねて来るところで、この唄を下座げざに使っているのを図らずも聴いたが、与市兵衛よいちべえ、おかや、お軽おきよなどの境涯きょうがいと、いかにも取り合わせの巧いうまいのに感心した。

当時、島の内の自分の家にも奉公人が大勢いたから、自分は彼等がああ唄をうたつて遊ぶのを見ると、同情もし、また羨うらやましくもあつた。父母の膝ひざもと二元を離れて他人の所に住み込んでいるのは可哀かわいそうだけれども、奉公人たちはいつでも国へ帰りさえすれば、会うことの出来る親があるのに、自分にはそれがないのである。そんなことから、自分は信田の森へ行けば母に会えるような気がして、たしか尋常じんじょう二三年の頃、そつと、家には内証で、同級生の友達を誘つてあそこまで出かけたことがあつた。あの辺へんは今でも南海電車を降りて半里も歩かねばならぬ不便な場所で、その時分は途中まで汽車があつたかどうか、何でも大部分ガタ馬車に乗つて、よほど歩いたように思う。行つてみると、楠くすのきの大木の森の中に葛の葉いなり稲荷ほころの祠が建つていて、葛の葉ひめ姫の姿見の井戸と云うものがあつた。自分は絵馬堂えまどうに掲かかげてある子別れの場の押絵おしえの絵馬や、雀右衛門じゃくえもんか誰かの似顔絵の額なまがを眺めたりして、わずかに慰なぐさめられて森を出たが、その帰り路に、ところどころの百姓家ひやくしようやの障子かげの蔭かげから、今もとんからり、とんからりと機はたを織る音が洩もれて来るのを、この上もなくなくなつかし

く聞いた。多分あの沿道は河内木棉の産地だったので、機屋がたくさんあったのであろう。とにかくその昔はどれほど自分の憧れを充たしてくれたか知れなかった。

しかし自分が奇異に思うことは、そう云う風に常に恋い慕ったのは主として母の方であつて、父に対してはさほどでもなかつた一事である。そのくせ父は母より前に亡くなつていたから、母の姿は万一にも記憶に存する可能性があつても、父のは全くないはずであつた。そんな点から考えると、自分の母を恋うる気持はただ漠然たる「未知の女性」に対する憧憬、——つまり少年期の恋愛の萌芽と関係がありはしないか。なぜなら自分の場合には、過去に母であつた人も、将来妻となるべき人も、等しく「未知の女性」であつて、それが眼に見えぬ因縁の糸で自分に繋がっていることは、どちらも同じなのである。けれどだしこう云う心理は、自分のような境遇でなくとも、誰にも幾分か潜んでいるだろう。その証拠にはあの狐嚙の唄の文句なども、子が母を慕うようでもあるが、「来るは誰故ぞ、様故」と云い、「君は帰るか恨めしやのうやれ」と云い、相愛の男女の哀別離苦をうたつているようでもある。恐らくこの唄の作者は両方の意味に取れるようにわざと歌詞を曖昧にぼかしたのではないか。いずれにせよ自分は最初にあれを聞いた時から、母ばかりを幻に描いていたとは信じられない。その幻は母であると同時に妻でもあつたと思



う。だから自分の小さな胸の中にある母の姿は、年老いた婦人でなく、永久に若く美しい女であった。あの馬方三吉の芝居に出て来るお乳の人の重の井、——立派な桂襠を着て、大名の姫君に仕えている花やかな貴婦人、——自分の夢に見る母はあの三吉の母のような人であり、その夢の中で自分はしばしば三吉になっていた。

徳川時代の狂言作者は、案外ずるく頭が働いて、観客の意識の底に潜在している微妙な心理に媚びることが巧みであつたのかも知れない。この三吉の芝居なども、一方を貴族の女の児にし、一方を馬方の男の児にして、その間に、乳母であり母である上臈の婦人を配したところは、表面親子の情愛を扱つたものに違いないけれども、その蔭に淡い少年の恋が暗示されていなくもない。少くとも三吉の方から見れば、いかめしい大名の奥御殿に住む姫君と母とは、等しく思慕の対象になり得る。それが葛の葉の芝居では、父と子とが同じ心になつて一人の母を慕うのであるが、この場合、母が狐であると云う仕組みは、一層見る人の空想を甘くする。自分はいつも、もしあの芝居のように自分の母が狐であつてくれたらばと思つて、どんなに安倍の童子を羨んだか知れない。なぜなら母が人間であつたら、もうこの世で会える望みはないけれども、狐が人間に化けたのであるなら、いつか再び母の姿を仮りて現れない限りもない。母のない子供があつた芝居を見れば、

きつと誰でもそんな感じを抱くであろう。が、千本桜の道行になると、母——狐——

——美女——恋人——と云う連想がもつと密接である。ここでは親も狐、子も狐であつて、しかも静と忠信狐とは主従のごとく書いてありながら、やはり見た眼は恋人同士の道行と映ずるように工まれてゐる。そのせいか自分は最もこの舞踊劇を見ることを好んだ。そして自分を忠信狐になぞらえ、親狐の皮で張られた鼓の音に惹かされて、吉野山の花の雲を分けつつ静御前の跡を慕つて行く身の上を想像した。自分はせめて舞を習つて、温習会の舞台の上でも忠信になりたいと、そんなことを考えたほどであつた。

「だがそれだけではないんだよ」

と、津村はそこまで語つて来て、早や暮れかかつて来た対岸の菜摘の里の森影を眺めながら、

「自分は今度、ほんとうに初音の鼓に惹き寄せられてこの吉野まで来たようなものなんだよ」

と、そう云つて、そのぼんちらしい人の好い眼もとに、何か私には意味の分らない笑いを浮かべた。

その五 国栖くず

さてこれからは私が間接に津村の話を取り次ぐとしよう。

そう云う訳で、津村が吉野と云う土地に特別のなつかしきを感じるのは、一つは千本桜の芝居の影響によるのであるが、一つには、母は大和の人だと云うことをかねがね聞いていたからであった。が、大和のどこから貫もらわれて来たのか、その実家は現存しているのか等のことは、久しく謎なぞに包まれていた。津村は祖母の生前に出来るだけ母の経歴を調べておきたいと思つて、いろいろ尋ねたけれども、祖母は何なに分ぶんにも忘れてしまったと云うことで、はかばかしい答は得られなかつた。親類の誰彼、伯父おじ伯母おばなどに聞いてみても、母の里方さとかたについては、不思議に知つている者がなかつた。ぜんたい津村家は旧家であるから、あたりまえなら二代も三代も前からの縁者が出入りしているはずであるが、母は実は、大和からすぐ彼の父に嫁とついだのでなく、幼少の頃大阪の色町へ売られ、そこからいつたん然しかるべき人の養女になつて輿こし入れをしたらしい。それで戸籍面こせきの記載きざいでは、文久三年に生れ、明治十年に十五歳で今橋三丁目浦門喜十郎の許もとから津村家へ嫁とつぎ、明治二十四年に二十九歳で死亡している。中学を卒業する頃の津村は、母に関してようようこれだけのことしか

知らなかつた。後から考えれば、祖母や親戚の年寄たちが余り話してくれなかつたのは、母の前身が前身であるから、語るを好まなかつたのであろう。しかし津村の気持では、自分の母が狭斜きょうしやの巷ちまたに生い立った人であると云う事實は、ただなつかしさを増すばかりで別に不名誉ふめいよとも不愉快ふゆかいとも感じなかつた。まして縁づいたのが十五の歳としであるとするれば、いかに早婚そうこんの時代だとしても、恐らく母はそういう社界の汚れに染まる度も少く、まだ純真むすめな娘らしさを失つていなかつたであらう。それなればこそ子供を三人も生んだのであろう。そして初々ういういしい少女の花嫁はなよめは、夫の家に引き取られて旧家の主婦たるにふさわしいさまざまな躰しつけを受けたであらう。津村はかつて、母が十七八の時に手写したと云う琴唄けいこぼんの稽古本けいこぼんを見たことがあるが、それは半紙を四つ折りにしたものへ横に唄の詞を列つらね、行間ぎょうかんに琴の譜ふを朱しゆで丹念たんねんに書き入れてある、美しいお家流いえりゆうの筆蹟ひつせきであつた。そののち津村は東京へ遊学したので、自然家庭と遠ざかることになつたが、そのあいだも母の故郷を知りたい心はかえつて募つる一方であつた。有りていに云うと、彼の青春期は母への思慕しほで過ぐされたと云つてよい。行きずりに遇あう町の女、令嬢れいじやう、芸者、女優、――などに、淡あわい好奇心を感じたこともないではないが、いつでも彼の眼に止まる相手は、写真で見る母の倅おもかけにどこか共通な感じのある顔の主ぬしであつた。彼が学校生活を捨てて大阪

へ歸つたのも、あながち祖母の意に従つたばかりでなく、彼自身があこがれの土地へ、——母の故郷に少しでも近い所、そして彼女がその短かい生しょうがい涯がの半分を送つた島の内の家へ、——惹き寄せられたためなのである。それに何と云つても母は関西の女であるから、東京の町では彼女に似通つた女に会うことが稀だけれども、大阪にいと、ときどきそう云うのに打ぶつかる。母の生ない育つたのはただ色町と云うばかりで、いずこの土地とも分らないのが恨みであつたが、それでも彼は母の幻まぼろしに会うために花柳界かりゆうかいの女に近づき、茶屋酒に親しんだ。そんなことから方々に岡惚おかぼれを作つた。「遊ぶ」と云う評判も取つた。けれども元來が母恋おぼいしさから起つたのに過ぎないのだから、一いっぺん遍も深入りをしたことはなく、今日まで童貞どうていを守り続けた。

こうして二三年を過すうちに祖母が死んだ。

その、祖母が亡くなつた後のある日のことである。形見の品を整理しようと思つて土蔵の中の小袖こそで箆だんすの抽出ひきだしを改めっていると、祖母の手蹟しゆせきらしい書類まじに交つて、ついで見たことのない古い書付けや文反古ふみほぐが出て来た。それはまだ母が勤め奉公時代に父と母との間に交された艶書えんしよ、大和の国の実母らしい人から母へ宛あてた手紙、琴、三味線、生け花、茶の湯等の奥許おくゆるしの免状めんじょうなどであつた。艶書は父からのものが三通、母からのものが

二通、初恋に酔う少年少女のたわいのない睦言の遣り取りに過ぎないけれども、互に人目を忍んでは首尾していたらしい様子合いも見え、殊に母のものは「……………おろかなりし心より思し召しをかえりみず文さし上候こなた心少しは御汲分け……………」とか「ひとかたならぬ御事のみ仰下されなんぼうか嬉しくぞんじ色々耻かしき身の上までもお咄申上げ……………」とか、十五の女の児にしては、筆の運びこそたどたどしいものの、さすがにませた言葉づかいで、その頃の男女の早熟さが思いやられた。次に故郷の実家から寄越したのは一通しかなく、宛名は「大阪市新町九軒粉川様内おすみどの」とあり、差出人は「大和国吉野郡国栖村窪垣内昆布助左衛門内」となっていて、「此度其身の孝心をかんしん致候ゆえ文して申遣し参らせ候左候えば日にまし寒さに向い候え共いよいよかわらせなく相くらされこのかたも安心いたし居候ととさんと申かかさんと申誠に誠に難有……………」と云うような書き出しで、館の主人を親とも思い大切にせねばならぬこと、遊芸のけいこに身を入れること、人の物を欲しがってはならぬこと、神仏を信心することなど、教訓めいたことのかずかずが記してあった。

津村は土蔵の埃だらけな床の上にすわったまま、うす暗い光線でこの手紙を繰り返し読んだ。そして気がついた時分には、いつか日が暮れていたので、今度はそれを書斎へ持って

出て、電燈の下にひろげた。むかし、恐らくは三四十年も前に、吉野郡国栖村の百姓家で、  
 行燈あんどんの灯影ほかげにうづくまりつつ老眼の脂やにを払い払い娘のもとへこまごまと書き綴つづっていた  
 であろう老嫗ろうおやの姿が、その二たひろにも余る長い巻紙の上に浮かんだ。文の言葉や仮名  
 づかいは田舎の婆ばばが書いたらしい覺おぼつかないふしも見えるけれども、文字はそのわ  
 りに拙ますくなく、お家流の正しい崩くずし方で書いてあるのは、満更まんざらの水呑み百姓でもなかつ  
 たのであろう。が、何か暮らし向きに困る事情が出来て、娘を金に替かえたのであることは  
 察せられる。ただ惜しいことに十二月七日とあるばかりで、年号が書き入れてないのだが、  
 多分この文は娘を大阪へ出してからの最初の便びんであろうと思われる。しかしそれでも若い  
 先短かい身の心細く、ところどころに「これかかさんのゆい言ぞや」とか、「たとえこち  
 らがいのちなくともその身に付そい出しゅつせいをいたさせ候間」などと云う文句が見え、何を  
 してはならぬ、彼かをしてはならぬと、いろいろと案じ過さして論ろんしている中にも、面白いの  
 は、紙を粗末にせぬようにと、長々と訓戒くんかいを述べて、「此このかみもかかさんとおりのす  
 きたる紙なりかならずかならずはだみはなさず大せつにおもうべし其身そのはよろずぜいたく  
 にくらせどもかみを粗末にしてはならぬぞやかかさんもおりとも此このかみをすくときはひび  
 あかぎれに指のさきちぎれるようにてたとんとたとんと苦くろういたし候」と、二十行にも亘わたつ

て書いていることである。津村はこれによつて、母の生家が紙すきを業としていたのを知り得た。それから母の家族の中に、姉か妹であるらしい「おりと」と云う婦人のあることが分つた。なおその外に「おえい」と云う婦人も見えて、「おえいは日々雪のつもる山に葛をほりに行き候みなしてかせぎためろぎん出来候えば其身にあいに参り候たのしみいてくれられよ」とあつて、「子をおもうおやの心はやみ故にくらがり峠のかたぞこいしき」と、最後に和歌が記されていた。

この歌の中にある「くらがり峠」と云う所は、大阪から大和へ越える街道にあつて、汽車がなかつた時代には皆その峠を越えたのである。峠の頂上に何とか云う寺があり、そこがほととぎすの名所になつていたから、津村も一度中学時代に行ったことがあつたが、たしか六月頃のある夜の、まだ明けきらぬうちに山へかかつて、寺でひと休みしていると、暁の四時か五時頃だつたらう、障子の外がほんのり白み初めたと思つたら、どこかうしろの山の方で、不意にひと声ほととぎすが啼いた。するとつづいて、その同じ鳥か、別なほととぎすか、二た声も三声も、——しまいには珍しくもなくなつたほど啼きしきつた。津村はこの歌を読むと、ふと、あの時は何でもなく聞いたほととぎすの聲が、急にたまらなくなつかしいものに想い出された。そして昔の人があの鳥の啼く音を故人の魂になぞらえ



て、「蜀魂しよつこん」と云い「不如歸ふじよき」と云つたのが、いかにももつともな連想であるような気がした。

しかし老婆の手紙について津村が最も奇あやしい因縁を感じたことが外にあつた。と云うのは、この婦人、——彼の母方の祖母にあたる人は、その文の中に狐のことをしきりに説いてるのである。「……………ずいぶんずいぶんこれからは御屋おやしろの稲荷いなりさまと白狐びやくこの命婦みょうぶの進のしんとをまいにちまいにちあさあさは拜まむべし左候さそつらえばそちの知ておる通りととさんがよべば狐のあのようによほへくるようになるもみないつしんの有る故なり……………」とか、それゆえこのたびのなんもまつたく白狐さまのお蔭かげとぞんじ参らせ候これ是これからは其御内そのおんうちの武運長久あしきやまいなきやうのきとう毎日毎日致し参らせ候ずいぶん随分随分と信心なされるべく……………」とか、そんなことが書いてあるのを見ると、祖母の夫婦はよほど稲荷の信仰こに凝り固まつていたことが分る。察するところ「御屋しろの稲荷さま」と云うのは、屋敷のうちほこらに小さな祠ほこらでも建てて勧進してあつたのではないか。そしてその稲荷のお使いである「命婦之進」と云う白狐も、どこかその祠の近くに巢を作つていたのではないか。「そちの知ておる通りととさんがよべば狐のあのようによほへくるようになるも」とあるのは、本当にその白狐が祖父の声に応じて穴から姿を現わすのか、それとも祖母になり祖

父自身になり魂が乗り移るのか明かでないが、祖父なる人は狐を自由に呼び出すことが出来、狐はまたこの老夫婦の蔭に附添つきそい、一家の運命を支配していたように思える。

津村は「此このかみもかかさんとおりとのすきたる紙なりかならずかならずはだみはなさず大せつにおもうべし」とあるその巻紙を、ほんとうに肌身はだみにつけて押し戴おいたいた。少くとも明治十年以前、母が大阪へ売られてから間もなく寄越よこされた文だとすれば、もう三四十年は立っているはずのその紙は、こんがりと遠火とわびにあてたような色に変つていたが、紙質は今のものよりもきめが緻密ちみつで、しつかりしていた。津村はその中に通つている細かい丈夫じょうぶな繊維せんいの筋を日に透すかして見て、「かかさんもおりとも此このかみをすくときはひびあかぎれに指のさきちぎれるようにてたとんとたとんと苦ろういたし候」と云う文句を想おもい浮かべると、その老人の皮膚にも似た一枚の薄い紙片の中に、自分の母を生んだ人の血が籠こもっているのを感じた。母も恐らくは新町の館やかたでこの文を受け取った時、やはり自分が今したようにこれを肌身につけ、押し戴おいたいたであろうことを思えば、「昔の人の袖そでの香かぞする」その文ふみが殻からは、彼には二重に床ゆかしくも貴い形見であつた。

その後津村がこれらの文書を手がかりとして母の生家なまがを突きとめるに至つた過程については、あまり管くだ々しく書くまでもなからう。何しろその当時から三四十年前と云えば、ち

ようど維新前後の変動に遭遇しているのだから、母が身売りをした新町九軒の粉川と云う家も、興入れの前に一時籍を入れていた今橋の浦門と云う養家も、今では共に亡びてしまつて行くえが分らず、奥許しの免状に署名している茶の湯、生け花、琴三味線等の師匠の家筋も、多くは絶えてしまつていたので、結局前に挙げた文を唯一の手がかりに、大和の国吉野郡国栖村へ尋ねて行くのが近道であり、またそれ以外に方法もなかつた。それで津村は、自分の家の祖母が亡くなつた年の冬、百ヶ日の法要を済ますと、親しい者にも其の目的は打ち明けずに、ひとり飄然と旅に赴く体裁で、思い切つて国栖村へ出かけた。

大阪と違つて、田舎はそんなに劇しい変遷はなかつたはずである。まして田舎も田舎、行きどまりの山奥に近い吉野郡の僻地であるから、たとい貧しい百姓家であつてもわざわざ二代か三代の間にあとかたもなくなるようなことはあるまい。津村はその期待に胸を躍らせつつ、晴れた十二月のある日の朝、上市から俵を雇つて、今日私たちが歩いて来たこの街道を国栖へ急がせた。そしてなつかしい村の人家が見え出したとき、何より先に彼の眼を惹いたのは、ここかしこの軒下に乾してある紙であつた。あたかも漁師町で海苔を乾すような工合に、長方形の紙が行儀よく板に並べて立てかけてあるのだが、その真つ白

な色紙しきしを散らしたようなのが、街道の両側や、丘の段々の上などに、高く低く、寒そう  
日にきらきらと反射しつつあるのを眺めると、彼は何がなしに涙が浮かんだ。ここが自分  
の先祖の地だ。自分は今、長いあいだ夢に見ていた母の故郷の土を踏ふんだ。この悠ゆう久きゆう  
な山間の村里は、大方母が生れた頃も、今眼の前にあるような平和な景色をひろげていた  
だろう。四十年前の日も、つい昨日の日も、ここでは同じに明け、同じに暮れていたのだ  
ろう。津村は「昔」と壁かと重えの隣りへ来た気がした。ほんの一瞬間いつしゆんかん眼をつぶって再  
び見開けば、どこかその辺まがきの籬まがきの内に、母が少女の群れに交って遊んでいるかも知れな  
った。

最初の彼の予想では、「昆布」は珍しい姓であるからじきに分ることかと思っていたのだが、  
窪垣くぼかゝい内と云う字あざへ行つて見ると、そこには「昆布」の姓が非常に多いので、目的の家を  
捜し出すのになかなか埒らちが明かなかつた。仕方がなく車夫と二人で昆布姓の家を一軒々々  
尋ねたけれども、「昆布助左衛門」を名乗る者は、昔は知らず、今は一人もいないと云う。  
ようようのことで、「それならあそこかも知れない」と、とある駄菓子屋だがしやの奥から出て来  
た古老らしい人が縁先に立つて指さしてくれたのは、街道の左側の、小高い段の上に見え  
る一と棟むねの草屋根であつた。津村は車夫を菓子屋の店先に待たして置いて、往来からなら

だらと半町ばかり引つ込んだ爪先上りの丘の路を、その草屋根の方へ登って行つた。め  
 つきりと冷える朝ではあつたが、そこはうしろになだらかな斜面を持つた山を繞らした、  
 風のあたらない、なごやかな日だまりになつた一廓で三四軒の家がいずれも紙をすいて  
 いた。坂を登って行く津村は、それらの丘の上の家々から若い女たちがちよつと仕事の手  
 を休めて、この辺に見馴れない都会風の青年紳士が上つて来るのを、珍しそうに見おろし  
 ているのに気づいた。紙をすくのは娘や嫁の手業になつてゐるらしく、庭先に働いてゐる  
 人たちはほとんど皆手拭いを姐さん被りにしてゐた。津村はその、紙や手拭いの沓え沓え  
 とした爽やかな反射の中を、教えられた家の軒近く立つた。見ると、標札には「昆布由松」  
 とあつて、助左衛門と云う名は記してない。母家の右手に、納屋のような小屋が建つてい  
 て、その板敷の上に十七八になる娘がつくばいながら、米の研ぎ汁のような色をした水  
 の中へ両手を漬けて、木の杵を篩つてはさつと掬い上げている。杵の中の白い水が、蒸籠  
 のように作つてある簾の底へ紙の形に沈澱すると、娘はそれを順繰りに板敷に並べ  
 ては、やがてまた杵を水の中へ漬ける。表へ向いた小屋の板戸が明いてゐるので、津村は  
 ひと叢の野菊のすがれた垣根の外にイみながら、見る間に二枚三枚と漉いて行く娘のあざ  
 やかな手際を眺めた。姿はすらりとしていたが、田舎娘らしくがっしりと堅太りした、

骨太な、大柄な児であつた。その頬は健康そうに張り切つて、若さでつやつやしていたけれども、それよりも津村は、白い水に浸つてゐる彼女の指に心を惹かれた。なるほど、これでは「ひびあかぎれに指のさきちぎれるよう」なものも道理である。が、寒さにいじめつけられて赤くふやけている傷々しいその指にも、日増しに伸びる歳頃の発育の力を抑えきれないものがあつて、一種いじらしい美しさが感じられた。

その時、ふと注意を転じると、母家の左の隅の方に古い稲荷の祠のあるのが眼に這入つた。津村の足は思わず垣根の中へ進んだ。そしてさつきから庭先で紙を乾していたこの家の主婦らしい二十四五の婦人の前へ寄つて行つた。

主婦は彼から来意を聞かされても、あまりその理由が唐突なのでしばらく遲疑する様子であつたが、証拠の手紙を出して見せると、だんだん納得が行つたらしく、「わたしでは分りませんから、年寄に会つて下さい」と、母家の奥にいた六十恰好の老媪を呼んだ。それがあの手紙にある「おりと」——津村の母の姉に当る婦人だったのである。

この老媪は彼の熱心な質問の前にオドオドしながら、もう消えかかつた記憶の糸を手繰り手繰り歯の抜けた口から少しづつ語つた。中には全く忘れていて答えられないこと、記憶ちがईと思われること、遠慮して云わないこと、前後矛盾していること、何かもぐも

ぐと云うには云つても息の洩れる声もが聴き取りにくく、いくら問い返しても要領を掴つかめな  
 かつたことなどがたくさんあつて、半分以上はこちらが想像で補うより外ほかはなかつたが、  
 とにかくそう云う風にしてでも津村が知り得た事柄は、母に關する二十年來の彼の疑問を  
 解とくに足りた。母が大阪へやられたのは、たしか慶けい応おう頃ころだったと婆ばあさんは云うのだけれ  
 ども、ことし六十七になる婆さんが十四五歳、母が十一二歳の時だったそうであるから、  
 明治以後であることは云うまでもない。それゆえ母はわずか二三年、多くも四年ほど新町  
 に奉公ほうこうしただけで、じきに津村家へ嫁といだことになる。おりと婆さんの口くちぶり吻くちぶりから察する  
 のに、昆布の家は当時窮きゆう迫はくこそしていたものの、相当に名聞を重んずる旧家で、そん  
 な所へ娘を勤めに出したことをなるべく隠していたのであろう。それで娘が奉公中ほうこうちゆうはもち  
 ろんのこと、立派な家の嫁になつた後までも、一つには娘の耻はじ、一つには自分たちの耻はじと  
 思つて、あまり行き来をきしなかつたのであろう。また、実際にその頃の色里の勤め奉公は、  
 芸妓げいぎ、遊女、茶屋女、その他何であるにしろ、いったん身売りの証文に判をついた以上、  
 きれいに親おやもと許もとと縁えんを切るのが習慣であり、その後の娘はいわゆる「喰くい焼やき奉公人」とし  
 て、どう云う風に成り行こうとも、実家はそれに係り合あう権利がなかつたでもあろう。し  
 かし婆さんのおぼろげな記憶によると、妹が津村家へ縁えんづいてから、彼女の母は一度か二

度、大阪へ会いに行つたことがあるらしく、今では大家たいけの御料人ごりようにんさん様に出世した結構なくめの娘の身の上を驚異をもつて語つていた折があつた。そして彼女にも是非大阪へ出て来るようにと言つてを聞いたけれども、そんな所へ見すばらしい姿で上れるはずもなし、妹の方もあれなり故郷を訪れたことがなかつたので、彼女はついぞ成人してからの妹と云うものを知らずにいるうち、やがてその旦那だんな様が死に、妹が死に、彼女の方の両親も死に、もうそれからはなおさら津村家との交通が絶えてしまつた。

おりと婆さんはその肉親の妹、——津村の母のことを呼ぶのに「あなた様のお袋さま」と云う廻りまわりくどい言葉を用いた。それは津村への礼儀からでもあつたらうが、事によると妹の名を忘れているのかも知れなかつた。「おえいは日々雪のふる山に葛くずをほりに行き候」とあるその「おえい」と云う人を尋ねると、それが総領娘で、二番目がおりと、末娘が津村の母のおすみであつた。が、ある事情から長女のおえいが他家へ縁づき、おりとが養子を迎えて昆布の跡を継いだ。そして今ではそのおえいもおりとの夫も亡くなつて、この家は息子の由松の代になり、さつき庭先で津村に応待した婦人がその由松の嫁であつた。そう云う訳で、おりとの母が存生の頃はすみ女に関する書類や手紙なども少しは保存してあつたはずだが、もはや三代を経た今日となつては、ほとんどこれと云う品も残っていない。



——と、おりと婆さんはそう語ってから、ふと思い出したように、立って仏壇の扉を開いて、位牌の傍に飾ってあった一葉の写真を持って来て示した。それは津村も見覚えのある、母が晩年に撮影した手札型の胸像で、彼もその複写の一枚を自分のアルバムに所蔵しているものであった。

「そう、そう、あなた様のお袋さまの物は、——」  
と、おりと婆さんはそれからまた何かを思い出した様子で付け加えた。

「この写真の外に、琴が一面ございました。これは大阪の娘の形見だと申して、母が大切にしておりましたが、久しく出しても見ませぬので、どうなっておりますやら、……」  
津村は、二階の物置きを捜したらあるだろうと云うその琴を見せて貰うために、畑へ出ていた由松の帰りを待った。そしてその隙に近所で昼食をしたため来てから、自分も若夫婦に手を貸して、埃の堆い嵩張った荷物を明るい縁先へ運び出した。

どうしてこんな物がこの家に伝わっていたのであろう、——色褪せた覆いの油単を払うと、下から現れたのは、古びてこそいるが立派な蒔絵の本間の琴であった。蒔絵の模様は、甲を除いたほとんど全部に行き亘っていて、両側の「磯」は住吉の景色であるらしく、片側に鳥居と反橋とが松林の中に配してあり、片側に高燈籠と磯馴松と浜辺の

波が描いてある。「海」から「竜角」。「四分六」のあたりには無数の千鳥が飛んでいて、「荻布」のある方、「柏葉」の下に五色の雲と天人の姿が透いて見える。そしてそれらの蒔絵や絵の具の色は、桐の木地が時代を帯びて黒ずんでいるために、一層上品な光を沈ませて眼を射るのである。津村は油単の塵を拭いて、改めてその染め模様を調べた。地質は多分塩瀬であろう、表は上の方へ紅地に白く八重梅の紋を抜き、下の方に唐美人が高楼に坐して琴を弾じている図がある。楼の柱の両側に「二十五絃弾月夜」「不堪清怨却飛来」と、一對の聯が懸っている。裏は月に雁の列を現わした傍に「雲みちによそえる琴の柱をはつらなる雁とおもいける哉」と云う文字が読めた。

しかしそれにしても、八重梅は津村家の紋でないのであるが、養家の浦門家の紋か、あるいはひよつとすると、新町の館の紋ではなかったのであろうか。そして津村家へ嫁ぐについて、不用になった色町時代の記念の品を郷里へ贈ったのではないか。恐らくその時分、実家の方に年頃の娘かなんぞがいて、その児のために田舎の祖母が貰い受けたと云うことも考えられる。またそうでもなく、嫁いでも長く島の内の家にあつたのを、彼女の遺言か何かによって国元へ届けたとも想像される。が、おりと婆さんも若夫婦も、一向その間の事情に関して知るところはなかった。たしか手紙のようなものが附いていたと思う

けれども、今ではそれも見あたらぬ、ただ「大阪へやられた人」から譲られたものであ  
ることを聞き覚えてゐる、と云うのみであつた。

別に、附属品を収めた小型の桐の匣があつて、中に琴柱と琴爪とが這入つてゐた。琴柱  
は黒っぽい堅木の木地で、それにも一つ一つ松竹梅の蒔絵がしてある。琴爪の方は、  
大分使い込まれたらしく手擦れてゐたが、かつて母のかぼそい指が箝めたであろうそれら  
の爪を、津村はなつかしさに堪えず自分の小指にあててみた。幼少の折、奥のひと間で品  
のよい婦人と検校とが「狐囃」を弾いてゐたあの場面が、一瞬間彼の眼交を掠め  
た。その婦人は母ではなく、琴もこの琴ではなかつたかも知れぬけれども、大方母もこれ  
を掻き鳴らしつつ幾度かあの曲を唄つたであろう。もし出来るならば自分はこの樂器を修  
繕させ、母の命日に誰か然るべき人を頼んで「狐囃」の曲を弾かせてみたい、と、そ  
の時から津村はそう思いついた。庭の稲荷の祠については守り神として代々祭つて来たの  
であるから、若夫婦たちもその手紙にあるものに相違ないことを確かめてくれた。もつと  
も現在では家族の内に狐を使う者はいない。由松が子供の頃、お祖父さんがよくそんなこ  
とをしたと云う噂を聞いたが、「白狐の命婦之進」とやらはいつの代にか姿を現わさな  
いようになり、祠のうしろにある椎の木の蔭にむかし狐が棲んでいた穴が残つてゐるばか

りで、そこへ案内をされた津村は、穴の入口に今は淋しく注連縄が渡してあるのを見た。——以上の話は、津村の祖母が亡くなった年のことであるから、宮滝の岩の上で彼が私に語った時からはまだ二三年前に溯る事実である。そして彼がこの間中から私への通信に「国栖の親戚」と書いて来たのは、このおりと婆さんの家を指すのであつた。と云うのは、何と云つてもおりと婆さんは津村に取つて母方の伯母であり、彼女の家は母の実家に違いないのだから、そのち彼は改めてこの家と親類の付き合いを始めた。そればかりでなく、生計の援助もしてやつて、伯母のために離れを建て増したり、紙すきの工場を拡げたりした。そのお蔭で昆布の家は、ささやかな手工業ではあるけれども、目立つて手広く仕事をするようになったのである。

その六 入の波

「で、今度の旅行の目的と云うのは?——」  
二人はあたりが薄暗くなるのも忘れて、その岩の上に休んでいたが、津村の長い物語が一段落へ来た時に、私が尋ねた。

「——何か、その伯母さんに用事でも出来たのかい？」

「いや、今の話には、まだちよつと云い残したことがあるんだよ。——」

眼の下の岩に砕けつつある早瀬はやせの白い泡あわが、ようよう見分けられるほどの黄昏たそがれではあつたが、私は津村がそう云いながら微かすかに顔あかを赧あかくしたのを、もののけはいで悟ることが出来た。

「——その、始めて伯母の家の垣根の外に立つた時に、中で紙をすいていた十七八の娘があつたと云つただろう？」

「ふむ」

「その娘と云うのはね、実はもう一人の伯母、——亡くなったおえい婆ばあさんの孫なんだそうさ。それがちよつどあの時分昆布の家へ手伝いに来ていたんだ」

私の推察した通り、津村の声は次第に極まり悪そうな調子になっていた。

「さつきも云つたように、その女の児は丸出しの田舎娘で決して美人でも何でも無い。あの寒中にそんな水仕事をするんだから、手足も無細工むさいくで、荒れ放題あに荒れている。けれども僕は、大方あの手紙の文句、『ひびあかぎれに指のさきちぎれるように』と云う——あれに暗示を受けたせいかな、最初にひと眼水めの中に漬かっている赤い手を見た時から、

妙みょうにその娘が気に入ったんだ。それに、そう云えばそう、どこか面おもざしが写真で見える母の顔に共通なところがある。育ちが育ちだから、女中タイプなのは仕方がないが、研みがきようによつたらもつと母らしくなるかも知れない」

「なるほど、ではそれが君の初音はつねの鼓つづみか」

「ああ、そうなんだよ。——— どうだろう、君、僕はその娘を嫁めらに貰もらいたいと思うんだが、

———

お和佐わさと云うのが、その娘の名であつた。おえい婆さんの娘のおもとと云う人が市田にながしと云う柏木附近の農家へ縁づいて、そこで生れた児なのである。が、生家の暮らし向きが思わしくないのです、尋じんじょう常じょう小学を卒おえてから五条の町へ下女奉公に出たりしていた。それが十七の歳に、実家の方が手が足りないので暇ひまを貰もらつて家に帰り、そののちずっと農事の助けをしているのだが、冬になると仕事がなくるところから、昆布の家へ紙すきの手伝いにやらされる。ことしももうじき来るはずだけれど、多分まだ来ていないであろう。それよりも津村は、まずおりと伯母さんや由松夫婦に意中を打ち明けて、その結果によつては、至急しゅうきゅうに呼び寄せて貰もらうなり、訪ねて行くなりしようと思つと云うのである。

「じゃあ、巧うまく行くと僕もお和佐さんに会える訳だね」

「うん、今度の旅行に君を誘ったのも、是非会って貰って、君の観察を聞きたかったんだ。何しろ境遇があまり違い過ぎるから、その娘を貰ったとしても果して幸福に行けるかどうか、多少その点に不安心がないこともない、僕は大丈夫と云う自信は持っているんだが」私はとにかく津村を促してその岩の上から腰を擡げた。そして、宮滝で俵を雇って、その晩泊めて貰うことにきめてあつた国栖の昆布家へ着いた時は、すっかり夜になっていた。私の見たおりと婆さんや家族たちの印象、住居の様子、製紙の現場等は、書き出すと長くなるし、前の話と重複もするから、ここには略すことにしよう。ただ二つ三つ覚えていることを云えば、当時あの辺はまだ電燈が来ていないで、大きな炉を囲みながらランプの下で家族達と話をしたのが、いかにも山家らしかったこと。炉には檜、櫟、桑などをくべたが、桑が一番火の保ちがよく、熱も柔かだと云うので、その切り株を夥しく燃やして、とても都会では思い及ばぬ贅沢さに驚かされたこと。炉の上の梁や屋根裏が、かっかつと燃え上る火に、塗りたてのコールターのように真っ黒くてら光っていたこと。そして最後に、夜食の膳に載っていた熊野鯖と云うものが非常に美味であつたこと。それは熊野浦で獲れた鯖を、笹の葉に刺して山越して売りに来るのであるが、途中、五六日か一週間ほどのあいだに、自然に風化されて乾物になる、時には狐にその鯖の身を浚われるこ

とがある、と云う話を聞いたこと。——などである。

翌朝、津村と私とは相談の上、ようやくめいめいが別箇行動を取ることに定めた。津村は自分の大切な問題を提げて、話をまとめて貰うように昆布家の人々を説き伏せる。私はその間ここには邪魔になるから、例の小説の資料を採訪すべく、五六日の予定で更に深く吉野川の源流地方を究めて来る。第一日は国栖を発し、東川村に後亀山天皇の皇子小倉宮の御墓を弔い、五社峠を経て川上の荘に入り、柏木に至って一泊。第二日は伯母ヶ峰を越えて北山の莊河合に一泊。第三日は自天王の御所跡である小椽の竜泉寺、北山宮の御墓等に詣で、大台ヶ原山に登り山中に一泊。第四日は五色温泉を経て三の公の峡谷を探り、もし行けたらば八幡平、隠し平までも見届けて、木樵りの小屋にでも泊めて貰うか、入の波まで出て来て泊まる。第五日は入の波から再び柏木に戻り、その日のうちか翌日に国栖へ帰る。——私は昆布家の人々に地理を尋ねて、大体こう云う日程を作った。そして津村との再会を約し、彼の成功を祈って出発したのであったが、津村は事によると、自分も柏木のお和佐の家まで出向くような場合があるう、それで私が柏木へ戻って来たなら念のためにお和佐の家へ立ち寄って見てくれるように、それはしかじかの所だからと、出がけにそんな話があった。



私の旅はほぼ日程の通りに撈はかどった。聞けばこの頃はあの伯母ヶ峰峠の難路にさえ乗合自動車まごこが通うようになり、紀州の木の本もとまで歩かずに出られるそうで、私が旅した時分とは誠まことに隔かく世せいの感がある。が、幸い天候にも恵まれ、予想以上に材料も得られて、四日目までは道の嶮けわしさも苦しさも「なあに」と言う気で押し通してしまったが、ほんとうに参ったのはあの三さんの公こう谷たにへ這入はいった時であった。もつともあそこへかかる前から「あの谷はえらい処ところです」とか「へえ、旦那だんなは三の公へいらつしやるんですか」とか、たびたび人に云われたので、私もあらかじめ覚悟かくごはしていた。それで四日目には少し日程を変更して五色温泉に宿を取り、案内者を一人世話して貰もらって明くる日の朝早く立った。

路は、大台ヶ原山みなもとに源みなもとを発たする吉野川の流れに沿うて下り、それがもう一本の溪流と合する二にの股またと云う辺へ来て二つに分れ、一つは真つすぐに入の波へ、一つは右へ折れて、そこからいよいよ三の公の谷へ這入る。しかし入の波へ行く本道は「道」に違いないが、右へ折れる方は木深い杉すぎ林はやしの中に、わずかにそれと人の足跡たどを辿れるくらいな筋が附いているだけである。おまけに前夜降雨があつて、二の股川の水みず嵩かさがにわかに殖ふえ、丸木橋が落ちたり崩くずれかかったりして、激げき流りゅうの逆捲さかまく岩の上を飛び飛びに、時には四つ這いに這わないと越えることが出来ない。二の股川の奥に「オクタマガワ」があり、そ

れから地蔵河原を渡渉して、最後に三の公川に達するまで、川と川との間の路は、何丈と知れぬ絶壁の削り立った側面を縫うて、ある所では両足を並べられないほど狭く、ある所では路が全く欠けてしまつて、向うの崖からこちらの崖へ丸太を渡したり、棧を打った板を懸けたり、それらの丸太や板を宙で繋ぎ合はして、崖の横腹を幾曲りも迂廻したりしている。こんな所を歩くのは、山岳家なら朝飯前の仕事であろうが、私は元来中学時代に機械体操が非常に不得手で、鉄棒や柵や木馬にはいつも泣かされた男なのである。その頃は年も若かつたし、今ほど太つてもいなかったから、平地を行くのなら八里や十里は歩けたけれども、こう云う難所は四肢を使って進むので、足の強弱の問題でなく、全身の運動の巧拙に関する。定めし私の顔は途中幾たびか青くなり赤くなりしたことであろう。正直のところ、もし案内者が一緒になかったら、私はとうにあの二の股の丸木橋の辺で引つ返したかも知れなかつた。案内者の手前きまりが悪いのと、一歩進んだら後へ退くのも前へ出るのと同じように恐ろしいので、仕方がなしに顫える足を運んだのであつた。そう云う訳で、その谷あいの秋色は素晴らしい眺めであつたけれども、足もとばかり視詰めていた私は、おりおり眼の前を飛び立つ四十雀の羽音に驚かされたくらいのもので、耻かしながらその風景を細叙する資格がない。だが案内者の方はさすがに馴れたもので、

刻み煙草を煙管の代りに椿の葉に巻いて口に咬え、嶮しい道を楽に越えながら、あれは何と云う滝、あれは何と云う岩、と、遙かな谷底を指して教えたが、

「あれは『御前申す』と云う岩です」

と、ある所でそんなことを云った。それからまた少し行くと、

「あれは『べろべど』と云う岩です」

と云った。私はどれがべろべどで、どれが御前申すと云う岩やら、こわごわ谷底を覗いただけではつきり見届けなかつたが、案内者の云うのに、昔から王の住んでいらした谷には、必ず御前申すと云う岩と、べろべどと云う岩がある、だから四五年前に東京からある偉いお方、——学者だつたか、博士だつたか、お役人だつたか、とにかく立派なお方がこの谷を見に來られて、やはり自分が案内をした時、そのお方が「ここに御前申すと云う岩があるか？」とお尋ねになつたから「へい、ございます」と云つて自分があの岩を示すと、「ではべろべどと云う岩はあるか？」と、重ねてお尋ねになつたので、「へい、ございます」と、又その岩を見せてあげたら、「なるほど、そうか、それならここは自天王のいらした所に違いない」と、感心してお歸りになつた、——などと云う話をしたが、その奇妙な岩の名の由来は分らなかつた。

この案内者は外にもまだいろいろの口碑を知っていた。昔、京方の討手がこの地方へ忍び込んだとき、どうしても自天王の御座所が分らないので、山また山を捜し求めつつ、一日偶然この峡谷へやって来て、ふと溪川を見ると、川上の方から黄金が流れて来る、そこで、その黄金の流れを伝わって溯って行ったら、果して王の御殿があつたと云う話。王が北山の御所へお移りになつてから、毎朝顔をお洗ひになるのに、御所の前を流れている北山川の川原へ立たれるのが例であつたが、いつも影武者が二人お供していて、どれが王様か見分けがつかない。討手の者がたまたまそこを通り合わせた村の老婆に尋ねると、老婆は、「あの、口から白い息を吐いていらつしやるのが王様だ」と教えた。そのために討手は襲いかかつて王の御首を挙げる事が出来たが、老婆の子孫にはその後代々不具の子供が生れると云う話。――

私は午後一時頃に八幡平の小屋に行き着き、弁当箱を開きながらそれらの伝説を手帳に控えた。八幡平から隠し平までは往復更に三里弱であつたが、この路はかえつて朝の路よりは歩きよかつた。しかしいかに南朝の宮方が人目を避けておられたとしても、あの谷の奥は余りにも不便すぎる。「逃れ来て身をおくやまの柴の戸に月と心をあわせてぞすむ」と云う北山宮の御歌は、まさかあそこでお詠みになつたとは考えられない。要するに

三の公は史実よりも伝説の地ではないであろうか。

その日、私と案内者とは八幡平の山男の家に泊めて貰って、兔うさぎの肉をご馳走になつたりした。そして、その明くる日、再び昨日の路を二の股へ戻り、案内者と別れてひとり入の波へ出て来た私は、ここから柏かしわぎ木まではわずか一里の道程だと聞いていたけれど、ここには川の縁に温泉が湧いていと云うので、その湯へ浸りに川のほとりへ行つてみた。二の股川を合わせた吉野川が幾らか幅はばの広い溪けい流りゅうになつた所に吊り橋ぼしが懸かかつていて、それを渡ると、すぐ橋の下の川原に湯が湧いていた。が、試みに手を入れると、ほんの日向ひなたみ水ずほどのぬくもりしかなく、百ひゃく姓くしやうの女たちがその湯でせつせと大根を洗っているのである。

「夏でなければこの温泉へは這入はいれません。今頃這入するには、あれ、あすこにある湯槽ゆおけへ汲くみ取つて、別に沸わかすのです」

と、女たちはそう云つて、川原に捨ててある鉄砲風呂てつぽう風呂を指した。

ちようど私わたしがその鉄砲風呂の方を振り返つたとき、吊り橋の上から、

「おーい」

と呼んだ者があつた。見ると、津村が、多分お和佐さんであろう。娘を一人うしろに連れ

てこちらへ渡つて来るのである。二人の重みで吊り橋が微かに揺れ、下駄の音がコーン、コーンと、谷に響いた。

私の計画した歴史小説は、やや材料負けの形でとうとう書けずにしまったが、この時に見た橋の上のお和佐さんが今の津村夫人であることは云うまでもない。だからあの旅行は、私よりも津村に取って上首尾を齎した訳である。

(昭和六年一月〜二月)

# 青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学014 谷崎潤一郎」筑摩書房

2008（平成20）年4月10日第1刷発行

底本の親本：「谷崎潤一郎全集 第十三巻」中央公論社

1982（昭和57）年5月25日

初出：「中央公論」中央公論社

1931（昭和6）年1月～2月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：kompass

校正：酒井裕二

2016年1月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 吉野葛

谷崎潤一郎

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>